



美しい星空をとりもどそう

“日本星空を守る会”環境庁で大石長官に天空照射規制を陳情

“美しい星空をとりもどそう”と、全国各地のアマチュア天文家たちで結成された「日本星空を守る会」

(代表、青木正博東亜天文学会変光星課長ら12氏)は、5月24日午後、環境庁に大石長官を訪ね、回転サーチライトの即時禁止と、一般照明の天空照射規制についての陳情書を手渡した。

ボウリング場や結婚式場などが宣伝用として屋上にとりつける回転サーチライトが、最近都会地で流行、アマチュア天文家たちの観測のさまたげとなっている。

この問題をまっさきにとりあげたのは、川崎市内のアマチュア天文家たちの集まりである川崎天文同好会

(会長、箕輪敏行同市立旭小校長、会員300人)。東京側の世田谷区玉川にある結婚式場と、大田区池上のボウリング場の屋上にとりつけられたサーチライトが、夜空を照らし、光が川崎側を向くたびに、望遠鏡の視野を一瞬明るくし、星の観測はほとんどできず、とくに写真撮影はできなくなった。

このような“光公害”は、回転サ

ーチライトが近くにある岐阜県飛騨天文台や仙台天文台にもおよんでいるが、回転サーチライトは、現在法的に規制できず、相手の厚意に訴えるしか方法がない。そこで、こうした光害から“美しい星空を守ろう”と、4月2日、国立科学博物館で「日本星空を守る会」が結成され、こんどの陳情となった。

陳情書は、「人類はいよいよ宇宙開発の時代を迎えた。これはわれわれが、日夜、営々と星空を相手として積み重ねてきた天文学の発展によるものである。ところが、近時無計画な都市開発、自然破壊と相まって光害ははなはだしくなり、いまでは明るい星まで見えなくなっている。

そのうえ、最近では、建物の屋上から回転サーチライトが、わがもの顔に回り出した。この光は10数kmの遠方におよび、中には数10kmに達するものさえある。

日本の天文学は、現在世界のトップレベルにあるが、もし、天体観測ができなくなったら、わが国の科学の伸展はどのようになるか。暦、時刻はもちろんのこと、物理、化学の

基礎になる天文学の消長は、まさにわが国の基礎科学の盛衰にかかわるものである。

専門家の天体観測ばかりではない。国の将来を左右する学校教育の場において、天文分野の教育は戦後大幅にとりいれられたが、年ごとにまず光害で、教師による天体観測の指導がまったく困難となった。

そこで回転サーチライトの即時禁止と法的規制、それに一般照明の場合、地上方向だけ照らして天空へ光がもれないよう規制をして欲しい、と述べている。これに対し大石長官は「法的規制は中々むつかしいが、関係官庁にさっそく連絡し、最大の努力をほらいたい」と語った。

星空を守る会の一行はこのあと、国会の公害特別委員会の加藤しづえ委員長や科学技術庁長官にも同じように陳情した。さらに、同日、東大で開かれていた日本天文学会の総会に出席、青木正博氏と箕輪敏行氏が川崎の回転サーチライトの話題を中心に、写真などで実情を訴えた。天文学会としても各方面に同様趣旨の要望書を提出する一方、今後、プロとアマが一体となって“光公害追放”にのりだそうと誓いあった。

ところで、日本星空を守る会では、各地の光害のようすを調べることになり、サーチライトの所在地、その所有者名(社名)、光害状況(写真などもつけて)などを同事務局(川崎市多摩区細山 535、箕輪方、川崎天文同好会)あて知らせて欲しいと、望んでいる。また関係地区で光害防止の運動をするさい、資料として陳情書が必要な場合は、送料(20円切手)を同封して同事務局に郵送すれば、陳情書の写しを送ってもらえる。また6月4日国立科学博物館でこの陳情の報告があり、今後同会の会員を増すことや一般人による署名運動を続けることになった。